JAPAN APIC

Since 1975

一般財団法人

国際協力推進協会 会報

No.019

January 2025

JAPAN APIC 一般財団法人 国際協力推進協会 会報

No.019
January 2025

CONTENTS

01 ごあいさつ

太平洋・カリブ事業

03 太平洋・カリブ学生招待計画 2024
APIC から JET へ 寄稿：ジャニーヌ・エマニュエルさん（2023 年度参加学生）

08 太平洋・カリブ記者招待計画 2024

太平洋事業

11 太平洋諸国・リーダー招待計画
パラオ女性大酋長招待計画

カリブ事業

13 日・カリブ友好年 2024 記念
カリブ 5 カ国文化関係者招待計画

留学生支援事業

16 第 2 期 APIC-UWI 留学生が上智大学に入学

17 第 9 期ザビエル留学生が上智大学に入学
「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い

18 第 8 期 APIC-MCT 留学生が上智大学大学院に入学

19 第 6 期 APIC-MCT 留学生が上智大学大学院を卒業／卒業生へのインタビュー

講演会事業

20 APIC 早朝国際情勢講演会

21 **「バルバドス　歴史の散歩道」（その 5）**
第 4 部　海賊たちの系譜
寄稿：品田 光彦　元 駐バルバドス日本国大使

25 令和 5 年度（2023 年度）事業報告書

26 APIC 役員名簿

今号の表紙写真

マーシャル諸島、ジャルート環礁
撮影者：フロイド・K・タケウチ
Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

※記事本文に掲載されている役職・機関名は、事業実施時点における名称を採用しています。

ごあいさつ

新年おめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年も、世界は名実共に激動の年となりました。1年が早く経過した感を抱きます。残念乍ら戦争や戦闘が続きました。多くの国で選挙もありました。最も注目されたのは、米国の選挙でした。それは、色々の意味で衝撃的な結果になりました。トランプ前大統領と共和党が圧勝し、大統領、上下両院の三つの重要機関を独占する「トライフェクタ」になりました。数年前に経験済みとはいえ、これから4年多くのことが心配されます。しかし、その中でも、関係国の協力が必要です。新年が世界にとりより良い年になることを念願したいと思います。

当協会の活動も、昨年は漸くコロナから正常化されました。それらの活動はこの会報でも詳しく報告しておりますので、ご覧いただければ大変幸甚に存じます。これらの活動実施に当たり、多くの方々にご支援、ご協力を頂きました。厚くお礼を申し上げます。新年はＡＰＩＣ創設50周年になります。引き続き有意義な活動に努めて参ります。

＊＊＊

昨年の事業のひとつとして、カリブ5か国文化関係招待計画を実施しました。10月、5か国から9人の関係者が訪日しました。東京、京都、金沢で我が国の文化遺産を訪問し、また文化の継承や促進を図っておられる方々との会合等も行いました。京都では、能楽師の河村晴久先生にお願いして、河村能舞台に代表団を受け入れて頂きました。訪日につき参加者から、日本の伝統文化には千年の歴史があることに圧倒された、日本と自分達の国との間での類似性や相違について一層理解が出来た等の感想を聞きました。参加者は、日本の文化を見て、自分達の文化をも再認識して帰国したのではないかと思います。歴史に揉まれた文化は、どこであれ、心が和みます。

2025年1月
一般財団法人 国際協力推進協会（ＡＰＩＣ）
理事長
重家 俊範

APIC の主な動き［2024 年 6 月～ 12 月］

6月
- 第 407 回早朝国際情勢講演会
（講師：外務審議官（経済担当）　小野 啓一 氏）
- ジャマイカでの日本語スピーチコンテスト開催支援

7月
- 太平洋・カリブ学生招待計画 2024
- 第 408 回早朝国際情勢講演会
（講師：前駐フィリピン特命全権大使　越川 和彦 氏）

8月
- パラオ女性大酋長招待計画

9月
- 第 409 回早朝国際情勢講演会
（講師：前駐韓国特命全権大使　相星 孝一 氏）
- 第 6 期 APIC-MCT 留学生が上智大学大学院を卒業
- 第 9 期ザビエル留学生、第 8 期 APIC-MCT 留学生、第 2 期 UWI 留学生が上智大学／大学院に入学

10月
- 第 410 回早朝国際情勢講演会
（講師：前駐ベトナム特命全権大使　山田 滝雄 氏）
- 太平洋・カリブ記者招待計画 2024
- カリブ 5 カ国文化関係者招待計画

11月
- 第 411 回早朝国際情勢講演会
（講師：外務省北米局審議官　熊谷 直樹 氏）

12月
- 第 412 回早朝国際情勢講演会
（講師：外務省中東アフリカ局長　安藤 俊英 氏）

太平洋・カリブ事業

太平洋・カリブ学生招待計画

Student Invitation Program

2024

2024年6月26日から7月20日までの約3週間、太平洋・カリブ地域から計10名の大学生を招待しました。このプログラムは、日本についての理解を深めるとともに、国際的な交流を促進することを目的としています。招待された学生たちは、日本滞在中、上智大学の短期プログラム“Summer Session in East Asian Studies”（以下、Summer Session）に参加し、週末にはAPIC主催の観光ツアーを通じて日本文化を体験しました。これにより、参加者は学びと共に、異なる文化背景を持つ学生たちとの交流を深め、日本の多様な社会を直接体感する機会を得ました。

プログラム概要

この招待計画は、夏季に実施されるのは今年で2回目となり、冬季プログラムと合わせて計7回目の開催となります。今回の参加学生は、太平洋地域から5名（フィジー、ソロモン諸島、パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島）、カリブ地域から5名（ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、バルバドス、アンティグア・バーブーダ、セントルシア）です。

学生たちは、7月1日から19日までの約3週間にわたるSummer Sessionを通じて、日本の文化、教育、歴史、社会、ポップカルチャー、芸術、日本語、東アジアの社会など、多岐にわたるテーマについて学びました。このプログラムには、世界中から参加する他の大学生たちと交流する機会も多く、多文化・多様な背景を持つ人々と共に学び合う貴重な経験となりました。

週末の日本文化体験

週末には、APIC主催の観光ツアーが行われました。6月28日には都内観光で、都内を一望できるオープントップバスツアーと江戸切子を体験し、浅草を訪問しました。参加した学生たちは、東京の全体像を把握し、日本文化に触れる初めての機会に感動していました。特にスカイツリーから浅草寺、国会議事堂などの新旧の建造物が融合する都市の姿に驚き、目に映るすべてが彼らにとって新鮮な体験であったことが窺えました。

7月6日には、横浜を訪れました。日本郵船氷川丸、横浜中華街、カップヌードルミュージアム、コスモワールドといった多様なスポットを巡る一日でした。特に氷川丸の見学では、島嶼国から来た学生たちがその歴史や役割に大変興味を持ち、真剣に見学している姿が印象的でした。当初、赤レンガ倉庫訪問を予定していましたが、コスモワールドの観覧車など自国にはないアトラクションを目にした学生からの要望により現地で変更しました。観覧車から見渡す横浜の一望に驚いている様子が印象的でした。

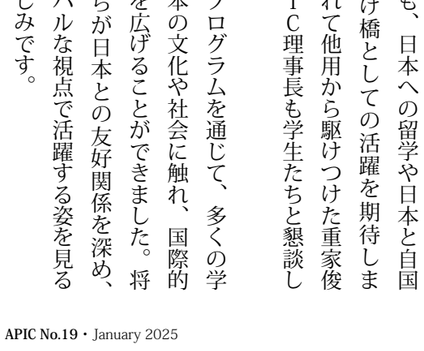
7月13日には、株式会社エヌアイデイの協力のもと、千葉県香取市佐原を訪れました。現地では、千葉県立佐原高等学校の生徒たちと交流し、香取神宮を参拝、学業成就のご祈祷を受けました。高校生たちにとって、普段接することのない国の人々との貴重な機会であり、別れ際には名残惜しさを感じる学生も多く、SNS交換して今後も交流を続けることを約束する場面も見られました。その後、「佐原の大祭 夏祭り」に参加し、実際に曳かれる山車を見学し、山車会館で祭りの歴史について学びました。学生たちは屋台での買い物をしたり、「小江戸」と呼ばれる佐原の町並みを散策したりと、祭りの雰囲気を楽しんでいました。

修了式・フェアウェルパーティー

プログラム最終日には、上智大学にて修了式とフェアウェルパーティが開催されました。修了式では、側嶋秀展APIC常務理事代行および森下哲郎上智大学グローバル化推進担当副学長が挨拶してこのプログラムの評価を述べ、側嶋常務理事代行から学生一人ひとりに修了証書が手渡されました。続いて、学生たちはSummer Sessionでの受講授業、自国と日本の文化・慣習等の比較や訪れた場所などの滞在中に受けた知的刺激についてのプレゼンテーションを行いました。一部の学生は、初めて親元を長期で離れた経験だったようで、感情が高ぶり涙を流す場面も見られました。

その後に行われたフェアウェルパーティでは側嶋常務理事代行による開会の辞の後、来賓としてボー駐日ジャマイカ大使館一等書記官が挨拶し、島内憲APIC評議員（元ブラジル大使）が学生たちには将来日本との架け橋として活躍してほしいという激励の言葉を贈り乾杯しました。また、このプログラム実施中に昨年本プログラムに参加したセントルシア出身のジャニーヌ・エマニュエルさんがJETプログラムに合格し、8月から鹿児島の高校にALT（外国語指導助手）として働くことが報告されました。彼女の活躍は今年の参加学生たちにとっても大きな励みとなることでしょう。今年の参加学生も、日本への留学や日本と自国との架け橋としての活躍を期待します。遅れて他用から駆けつけた重家俊範APIC理事長も学生たちと懇談しました。

このプログラムを通じて、多くの学生が日本の文化や社会に触れ、国際的な視野を広げることができました。将来、彼らが日本との友好関係を深め、グローバルな視点で活躍する姿を見るのが楽しみです。



修了式でのプレゼンテーションの様子

上から、フェアウェルパーティ、上智大学学生食堂、浅草観光

1. 都内バスツアーの様子　2. 横浜のカップヌードルミュージアムにて　3.「佐原の大祭」にて

参加した学生の声

フィジー

南太平洋大学
University of the South Pacific

レティーラ・メール さん
Ms. Letila Male

今年の夏休みは、私にとって記憶に残る特別なものとなり、２０２４年のハイライトでした。18歳の私が夢見ていた「未来を生きる国、日本」に、22歳で訪れることができたのは、ＡＰＩＣのサポートのおかげで上智大学の東アジア研究サマーセッションに参加できたからです。このプログラムは、単に夢を叶えるだけでなく、学びの場でもありました。南太平洋大学を代表して参加した私は、自分の島（"my vauna"）の存在も背負い、日本で得た知識や経験を持ち帰る決意で臨みました。

到着直後、東京の夜景や明るい街の光に圧倒され、24日間にわたる冒険の始まりを感じました。上智大学での授業は、刺激的で厳しいものでしたが、新しい知見やスキルを得ることができました。世界中から集まった優秀な学生たちとの意見交換や、教授陣の指導を受ける機会は、学問的にも個人的にも大きな価値をもたらしました。日本の大学生としての生活を体験することは、非常に貴重で感動的な経験でした。

授業外でも、日本の日常生活や文化にどっぷり浸ることができました。東京の鉄道ネットワークを使いこなし、渋谷、新宿、原宿といった街を探検する日々は、新たな発見の連続でした。特に、ＡＰＩＣ主催のフィールドトリップでは、歴史的な場所を訪れることで、授業で学んだ知識が実際の体験として深く刻まれました。氷川丸の展示や香取神宮での体験を通じ、日本の伝統や文化が現代社会にどのように息づいているのかを学ぶことができました。

さらに、このプログラムを通じて一生の友人たちと出会えたことも、大きな財産となりました。共にセブン-イレブンの食べ物を「試して評価」したり、横浜の観覧車で高所恐怖症を克服したりする中で、絆を深めました。彼らとの共有の瞬間は、私にとって日本での「もう一つの家」を感じさせるものでした。

この夏のプログラムは、個人的にも学問的にも深く影響を与えるものでした。日本での時間は、私を快適な場所から引き離し、自分自身を見つけ、個人として成長するための原動力となりました。日本の社会に浸り、新しい友人を作り、個人的な挑戦や「恐怖」を克服するすべての瞬間が、私の日本や東アジア地域、そして世界に対する理解と視点を豊かにし、形作りました。この忘れられない旅から得た教訓と価値に感謝しています。

パラオ

パラオ短期大学
Palau Community College

キンラン・ヤーク さん
Mr. Quinlan Yaoch

飛行機が下降し、日本の地上の景色が見え始めた瞬間、この24日間の旅が人生を変える体験になる予感がしました。風力発電の風車や広がる太陽光パネル、田んぼの横に並ぶ町々など、初めて目にする日本の光景に心が躍りました。空港に到着すると、日本特有のおもてなしの心とスーパーマリオのキャラクターが私を迎えてくれました。その後、特急列車で東京に向かい、平日は上智大学での充実した授業、週末は日本文化や観光を体験するという日々がスタートしました。

上智大学では、優れた教授陣から貴重な知識を得ることができました。授業では新しい学びやスキルを吸収し、従来の考え方に挑戦する刺激的な環境を楽しむことができました。学問的な発見だけでなく、異なる文化や背景を持つ学生たちとの交流を通じて、多様な視点を共有する貴重な経験を得ました。この学びは私の価値観を広げ、成長を促してくれるものでした。

特に印象に残っているのは、週末のフィールドトリップや自由時間を使った日本の文化体験です。オープントップバスでの東京観光では、東京タワーや浅草寺など、現代建築と伝統建築が混在する光景に感動しました。また、横浜では、日米の海上貿易の歴史を学びながら、中華街やカップヌードルミュージアムを訪れるなど、歴史と現代の魅力を存分に味わいました。最後の週末には佐原の神社や祭りを訪れ、美しい屋台料理を楽しむ中で日本の伝統文化に触れることができました。

東京での自由時間もまた特別な体験でした。渋谷、銀座、原宿といった街を散策し、夏の花々や鮮やかなファッション、香り豊かな日本料理に囲まれる中で、東京の多彩な文化を満喫しました。街ごとに異なる雰囲気を感じながら、日本の日常生活にどっぷりと浸ることができました。

しかし、この旅を特別なものにしてくれた最大の要因は、仲間との出会いです。世界中から集まった多様な背景を持つ仲間たちは、それぞれの物語を持ち、私に新しい視点を与えてくれました。彼らとの交流は、私の従来の価値観を問い直すきっかけとなり、自分自身の興味や信念について深く考える時間を与えてくれました。一緒に過ごした時間、無数の思い出、そして感じた愛や優しさは、私にとってかけがえのない財産です。

「忘れられない」「人生を変える」「一生に一度」――そんな言葉を使っても、この旅の全てを表現するのは難しいほど、特別な経験となりました。日本の文化や伝統に触れ、新たな仲間や指導者と深い関係を築く中で、私の自己や人生に対する見方は永遠に変わりました。このプログラムを通じて得た全ての瞬間と学びに感謝し、いつか再び仲間たちと日本で再会できる日を心から願っています。

プログラムに参加した 10 名の学生のうち、４名の感想文を掲載しています。（APIC による仮訳（要約））

バルバドス

西インド諸島大学 ケイブヒル校
University of the West Indies (Cave Hill Campus)

アシュリー・キンチ さん
Ms. Ashlee Kinch

私はアシュリー・キンチ、バルバドスの西インド諸島大学（ＵＷＩ）で心理学を学ぶ19歳です。この夏、ＡＰＩＣとＵＷＩの提携により、日本を訪れる貴重な機会を得ました。上智大学サマーセッションでの授業を通じて、日本の文化や歴史を学びながら、世界中から集まった学生たちと交流する充実した時間を過ごしました。

カリブ海の島国から来た私にとって、日本は到着した瞬間から驚きの連続でした。まず目に入ったのは、早朝の明るい空でした。午前６時の到着時にはすでに日が昇り、「日の出の国」と呼ばれる日本の魅力を実感しました。また、バルバドスでは日没が早いため、東京で夜７時でも明るさが残っていることに違和感を覚えました。他にも、夜空に星が見えないことや、梅雨の時期ならではの長時間降り続く雨、日本特有の湿度の高さに驚かされました。熱帯気候に慣れている私でも、日本の蒸し暑さや霧の発生は新鮮な経験でした。

週末の観光では、ＡＰＩＣが企画したツアーを通じて日本の多彩な魅力を発見しました。最初の週末には、皇居や国会議事堂、東京タワー、浅草寺などを巡る東京バスツアーに参加し、江戸切子の一日体験で伝統工芸に触れることもできました。次の週末には横浜を訪れ、山下公園や中華街、カップヌードルミュージアムなどを探索しました。コスモワールドでは初めて観覧車に乗り、「太鼓の達人」に挑戦するなど、日本のポップカルチャーを楽しむ時間も特別な思い出となりました。

最も印象的だったのは、千葉県佐原での体験です。高層ビルが立ち並ぶ東京とは対照的に、佐原は自然豊かな風景が広がる場所でした。田園地帯や森林、小川に囲まれた静かな環境で、日本の美しい自然を満喫しました。佐原高校の生徒たちと昼食を共にし、香取神宮での祈祷にも参加する中で、彼らの温かさに触れ、短い時間ながら深い絆を築くことができました。また、佐原の大祭では山車の迫力や伝統文化の魅力を感じ、祭りを支える人々の情熱に感動しました。山車会館で学んだ歴史や意義は、私に日本文化の奥深さを教えてくれました。

このプログラムを通じて、私は多くのことを学び、成長することができました。異なる文化的背景を持つ人々との交流を通じて、自分の価値観を広げ、生涯の友情を築くことができたことは大きな財産です。この経験を支えてくれたＡＰＩＣとＵＷＩには心から感謝しています。さまざまな文化的背景、民族、人種の人々と出会い、彼らと生涯にわたる友情や絆を築くことができました。これらの忘れられない経験を大切にし、いつか再び日本を訪れることを願っています。

セントルシア

西インド諸島大学 グローバル校
University of the West Indies (Global Campus)

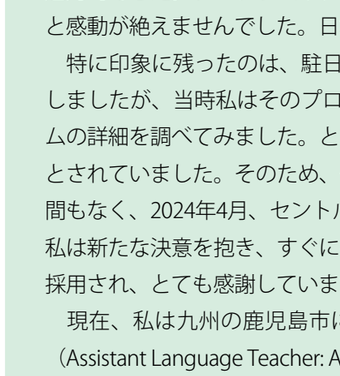
ガブリエル・ウォルシュ さん
Ms. Gabrielle Walsh

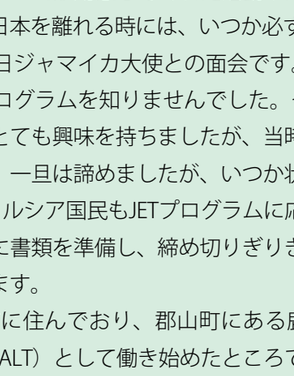
太平洋の東に位置し、祭りの太鼓の音が響く神秘的な日本。この国は、私にとって特別な思い出が刻まれる場所となりました。日本を訪れる機会を夢見ていた私にとって、その機会が想像よりも早く訪れたことは、とても幸運な出来事でした。

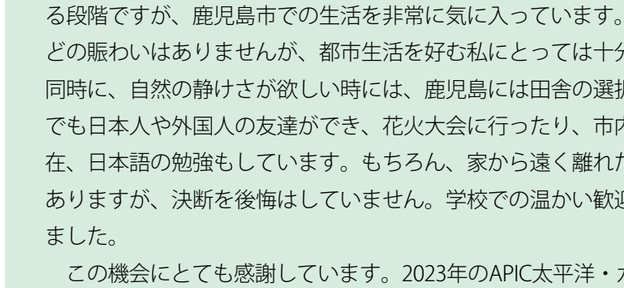
到着後最初の土曜日、はとバスツアーで東京の名所を巡りました。皇居、国会議事堂、東京タワーなど、これまで写真でしか見たことのない場所を実際に目の当たりにする体験は、現実離れした感覚でした。その壮大さに圧倒されながらも、私が特に感銘を受けたのは「些細なこと」でした。広大な道路や庭園、高層ビル、芸術的な建築物など、日常の中で目にするものすべてが新鮮で、感謝の念が湧き上がりました。

浅草では江戸切子の体験を通じて、日本の伝統工芸に触れることができました。また、横浜では日本郵船氷川丸を見学し、山下公園の美しい花壇を散策しました。横浜の魅力は、大都会でありながら静けさを感じられる場所があることです。同じ日に訪れたカップヌードルミュージアムでは、オリジナルのカップヌードルをデザインする楽しさを味わい、最後には横浜コスモワールドで観覧車やアーケードゲームを楽しむ特別な時間を過ごしました。この予定外の活動が急きょ追加されたのも、プログラムの柔軟さと学生の意見を尊重する姿勢を感じられるエピソードでした。特に印象的だったのは、千葉県佐原での文化体験です。佐原高校の生徒たちと昼食を共にし、彼らとの会話を通じて生活や学びについて知ることができたのは心温まる瞬間でした。別れ際には予想以上に寂しさを感じるほど、短時間で絆を築くことができました。佐原の町並みを歩く中で、江戸時代の風情をそのまま残す運河の景色や、祭りの賑わいを堪能しました。自然豊かな環境の中での新鮮な空気や美味しい屋台料理は、日本文化の一端に触れる貴重な体験でした。

もちろん、上智大学での時間も忘れることはありません。この学問的に豊かで刺激的な環境で学べたことに対して、心から感謝しています。世界中から集まった仲間たちや新たにできた友人たちと一緒にキャンパスに通う日々が楽しみで、貴重な瞬間を共有しながら、豊富な知識を得ることができました。私は、ＵＷＩグローバルキャンパスの学生として、これが初めての本格的なキャンパス体験でしたが、真の大学生活を始めるのにこれ以上ない場所を選ぶことができたと思います。多くの素晴らしい人々と出会い、今では「見つけた家族」と呼べる友人もできました。彼らに再会できる日が待ち遠しいです。







1. 配属先の鹿児島県立明桜館高校にて（本人提供）
2. 2023 年度 学生招待計画にて、カップヌードルミュージアム訪問
3. 2023 年度 学生招待計画にて、ジャマイカ大使館訪問

APIC から JET へ

セントルシア出身
ジャニーヌ・エマニュエルさん
鹿児島で外国語指導助手に

2023年、西インド諸島大学オープンキャンパスから太平洋・カリブ学生招待計画に参加したジャニーヌ・エマニュエルさんが、JETプログラムに合格し、2024年8月から外国語指導助手として鹿児島の県立明桜館高校に配属されました。JETプログラム応募の経緯や鹿児島での生活について伺いました。

（APICによる仮訳）

※JETプログラム：語学指導等を行う外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching Programme）の略。地方自治体が総務省、外務省、文部科学省及び一般財団法人自治体国際化協会(CLAIR)の協力の下に実施。

2023年のAPIC太平洋・カリブ学生招待プログラムに参加したことで、日本とその文化に多く触れる機会を得ました。それまでにも日本を訪れた人々から多くの話を聞いていましたが、実際に体験するのはとても魅力的でした。プログラム中、APICが用意してくれた活動やスケジュール外の自発的な冒険を通じて、驚きと感動が絶えませんでした。日本を離れる時には、いつか必ず戻ってきたいという思いが強く残りました。

特に印象に残ったのは、駐日ジャマイカ大使との面会です。その際、大使はJETプログラムについて言及しましたが、当時私はそのプログラムを知りませんでした。セントルシアに戻ってから、私はJETプログラムの詳細を調べてみました。とても興味を持ちましたが、当時の情報ではセントルシア国民は応募できないとされていました。そのため、一旦は諦めましたが、いつか状況が変わることを願っていました。それから間もなく、2024年4月、セントルシア国民もJETプログラムに応募できるとの告知が届きました。その瞬間、私は新たな決意を抱き、すぐに書類を準備し、締め切りぎりぎりで応募しました。幸運にも、プログラムに採用され、とても感謝しています。

現在、私は九州の鹿児島市に住んでおり、郡山町にある鹿児島県立明桜館高等学校で外国語指導助手（Assistant Language Teacher: ALT）として働き始めたところです。今は新しい生活にまだ慣れようとしている段階ですが、鹿児島市での生活を非常に気に入っています。当初は少し不安でしたが、鹿児島市は東京ほどの賑わいはありませんが、都市生活を好む私にとっては十分満足できる都会の雰囲気があります。それと同時に、自然の静けさが欲しい時には、鹿児島には田舎の選択肢もあります。ここに来てからは、仕事以外でも日本人や外国人の友達ができ、花火大会に行ったり、市内のさまざまな場所を探検したりしました。現在、日本語の勉強もしています。もちろん、家から遠く離れた新しい国への引っ越しや生活は大変なこともありますが、決断を後悔はしていません。学校での温かい歓迎は、この素晴らしい経験をさらに高めてくれました。

この機会にとても感謝しています。2023年のAPIC太平洋・カリブ学生招待プログラムへの参加は、日本とその文化への見方をポジティブに変えるだけでなく、私がJETプログラムに参加する決断を下す上で最も重要な要素でした。APICのプログラムは、私の中で最も記憶に残る経験の一つであり、大きな影響を与えました。

太平洋・カリブ事業

太平洋・カリブ記者招待計画

APIC Japan Journalism Fellowship

2024

２０２４年９月27日から10月７日まで、ＡＰＩＣは、公益財団法人フォーリン・プレスセンター（ＦＰＣＪ）の協力のもと、島根県の海士町などにおける環境・観光等の側面を含めた日本の地方振興をテーマとして、太平洋島嶼国から４名、カリブ諸国から２名の記者の参加を得て、「太平洋・カリブ記者招待計画」を実施しました。

参加者は、フィジーからライセアナ・ナシーガ氏、マーシャル諸島からイーブ・バーンズ氏、サモアからライーポイーバ・シェリル・ジャクソン氏、バヌアツからドディー・モーリス氏、バルバドスからサンディー・ディーン氏、ジャマイカからロリー・デイリー氏。加えて、共同プログラム・コーディネーターとして、フロイド・タケウチ氏及びドーン・マタス氏の２名も参加しました。この記者招待計画においては、各記者は共同プログラム・コーディネーターの指導の下、毎日、取材を終えた後、確認・打合せを行い、記事を１本以上執筆することが課されました。なお、各訪問先にはＡＰＩＣの側嶋常務理事代行が同行しました。

今回、一行は、都内のほか、鳥取県、島根県の海士町、松江市、出雲市で取材を行いました。

本計画は、２０１５年以降毎年実施してきましたが、コロナ禍のために２０２０年と２０２１年は中止し、２０２２年に再開して、２０２４年で通算８回目の実施となりました。

＊＊＊

都内視察とブリーフィング

９月27日に記者たちは共同プログラム・コーディネーターと合流し、最初の助言を得て都内を経験した後、30日にＡＰＩＣにおいてプログラムについての全般的な説明を受けました。その際、重家理事長は、日本の歴史と政治・経済・社会の現状について説明しました。それから一行は外務省を訪問し、アジア大洋州局大洋州課と中南米局カリブ室から、各出身国と日本との関係等について説明を受けました。

前米子市長の取材等

10月１日朝、一行は、羽田から山陰に向かい、米子鬼太郎空港に到着後、大根島の由志園において元外交官で前米子市長の野坂康夫氏と昼食をともにし、前市長から、市長として取り組んだこと、少子高齢化等の問題、更にはふるさと納税の評価を含め、地方自治の状況について説明を受けました。食事後、一行は前市長の案内で由志園の日本庭園を鑑賞しました。

それから一行は、境港市で「ゲゲゲの鬼太郎」のキャラクターが各所に配置されている水木しげるロードの散策を楽しんだ後、七類港からフェリーで隠岐諸島の海士町に赴きました。

野坂前市長との昼食

島根県隠岐諸島の海士町を訪問

10月２日、まず記者一行は、海士町役場を訪問し、大江和彦町長他を表敬し、町長から農業と漁業の従事者が多

い同町において人や企業を誘致する政策を実施してきていることについて説明を受けた後、課長レベルから海士町の取組について詳しく説明を受けました。人口減少と財政危機に直面した海士町は、町長始め町職員の給料カットを実施しつつ、人とビジネスの誘致活動に取組み、人口も増加に転じ、財政状況も改善したとのことでした。

その後、海士町に移住してナマコ加工工場を経営している宮崎雅也氏を訪問し、ナマコの加工や輸出の状況等について説明を受けました。

それから、漁港のある豊田地区に移動し、同地区の方々からの指導を得て、捕れたてのハマチをおろして刺し身にして、それを使った丼を作る体験をした後、自分で作った丼を昼食に食べました。

午後は、米国出身で、ミクロネシア連邦で教職に従事した後、訪日し、海士町でボート製作を行っている

上：海士町役場にて海士町町長及び幹部と
下：隠岐國学習センターにて

ハワード・ライス氏の製作現場を訪問し、同氏が海士町でボート製作に携わることとなった経緯と、子供たちにボートの製作や航海に関することを教えていること等の説明を受けました。

その後、公立の隠岐國学習センターを訪問し、同センターが高校での学習を補っている状況を確認し、地元の高校生と域外から留学している高校生の双方から海士町での学習・生活状況等について聴取しました。

最後に、一行は、大江町長を始めとする町役場関係者と夕食をともにし、くつろいだ雰囲気の下、懇談を行いました。

3日朝、一行は、フェリーで海士町を出発しましたが、その際、大江町長と町役場の担当者から見送りをしていただきました。

島根県を訪問

3日午前、海が荒れていたため、目的地が島根県七類港から鳥取県境港港に変更になりましたが、ほぼ予定通り本土に到着しました。

一行は、午後、島根県庁で地域振興部中山間地域・離島振興課、商工労働部観光振興課、及び環境生活部環境政策課、並びに島根県水産技術センターから、島根県の概要、中山間地域対策（「小さな拠点づくり」）、観光振興、宍道湖におけるしじみ資源の管理等について説明を受けました。

その後、山陰中央新報社において、万代剛編集局次長、藤原基壮総務局次長、及び、オンラインで隠岐の島町から参加した鎌田剛隠岐支局長から、隠岐諸島での取材を含む同社の活動状況について説明を受け、メディアとしての共通の関心事項等について意見交換した後、職場に案内され、杉谷健司編集局長から説明を受けて、作業現場を視察しました。

4日、悪天候のため、早朝に予定していたしじみ漁の視察は中止となり、一行は、午前、宍道湖漁業協同組合において、しじみ漁のこれまでの経緯や現状について、しじみ資源維持のための方策を含め説明を受け、販売用のしじみ選別方法の実演を見た後、渡部和夫組合長他との昼食懇談を行いました。昼食にはしじみ汁もご馳走になりました。

午後は、島根県立宍道湖自然館ゴビウスを訪問し、島根県の豊かな自然を理解してもらうという目的で宍道湖や中海の魚を中心に展示し、水槽の水位を子供たちの目線に合わせていることや、子供向け学習プログラムを実施していること等、ゴビウスの特徴について説明を受けた後、水族館を案内してもらいました。記者達は島国出身ですが、自国に水族館がない国もあり、水族館の視察を楽しんでいたようです。

5日（土）は、晴天となり、一行は、観光客として、午前、英語を話すボランティアの案内により松江城の歴史と国宝たる具体的価値について説明を受け、その後、堀川の遊覧船で、回りの景色と低い橋をくぐる際船の屋根が下がるのを受け低姿勢にしゃがむ経験を楽しみました。

午後、足立美術館を訪問し、同美術館設立の経緯、人口庭の手入れ、所蔵美術品等について説明を受け、一同、庭園の美しさに感銘を受けたようでした。

再び都内で取材およびプログラム修了式

一行は、7日午前、朝日新聞東京本社で、国際報道部の鈴木暁子次長から、作業場を案内された後、会議室で各国のメディアの状況や国際情勢等についてジャーナリスト同士の率直な意見交換を行いました。

午後は、東京スーパーエコタウン事業について、東京都の関係者からリサイクル率を高めて最終処分するゴミの量を減らす取組等の説明を受けた後、高俊工業で産業廃棄物について90％以上をリサイクルしている処理状況を視察しました。

＊＊＊

同日夕刻に、プログラム修了式と重家理事長主催夕食会が開催され、各記者は取材の成果を報告しました。印象に残ったものは、海士町コミュニティの状況、島根県の観光資源、日本の記者との意見交換、ふるさと納税制度、気候変動、廃棄物処理等、記者により異なっていましたが、皆、今回の訪問は有意義だったと述べていました。

10年前のAPIC記者招待計画の開始以来、同計画の準備と実施に関わってきた共同プログラム・コーディネーターのフロイド・タケウチ氏は本年限りでコーディネート業務から引退することとなり、重家理事長から同氏に感謝の記念品を贈呈しました。2025年からは、ドーン・マタス氏がプログラム・コーディネーターを務めます。

1. 刺身作り体験
2. 宍道湖漁業協同組合にて
3. 松江城にて

4. 高俊興業視察
5. コーディネーターを引退するフロイド・タケウチ氏への記念品贈呈
6. 重家理事長主催夕食会

滞在中の主なスケジュール

9/27（金）	来日
9/28（土）	都内視察
9/29（日）	自由日
9/30（月）	APIC によるプログラムオリエンテーション 外務省ブリーフィング（大洋州課、カリブ室）
10/1（火）	島根県へ移動 野坂 前米子市長と昼食（由志園） 水木しげるロード散策 島根県・海士町へ移動
10/2（水）	海士町長等 表敬、海士町による説明 干しナマコ工場 訪問 ボート製作現場 訪問 隠岐國学習センター 訪問 海士町関係者との夕食会
10/3（木）	松江市へ移動 島根県庁訪問 山陰中央新報社 訪問
10/4（金）	宍道湖漁業協同組合 訪問 宍道湖自然館ゴビウス 訪問
10/5（土）	松江城 視察、堀川遊覧船 乗船 足立美術館 訪問 東京へ移動
10/6（日）	自由日
10/7（月）	朝日新聞 東京本社 訪問 東京スーパーエコタウン 視察 プログラム修了式・APIC 理事長主催夕食会
10/8（火）	離日

太平洋諸国・リーダー招待計画

パラオ女性大酋長招待計画

ＡＰＩＣは、パラオの独立30周年及び日本・パラオ国交樹立30周年に当たる２０２４年の８月28日から９月２日まで、パラオからビルン・グローリア・ギボン・サリー大酋長（注：パラオの16州には、男女の伝統的指導者である酋長がいますが、そのうち最も高位の男女各２名の大酋長のひとり）、バージニア・ナンシー・ウォン、及びタギー・ウロイ・シゲルドコウ・サリー（ビルン・サリー大酋長の娘）の３名の女性伝統的指導者を訪日招待しました。

ＡＰＩＣによるオリエンテーションと歓迎夕食会

８月29日午前、ＡＰＩＣは、ビルン・サリー大酋長一行に、オリエンテーションを行いました。重家俊範理事長は、一行を歓迎した後、日本の政治・経済・社会情勢について説明しました。その後、側嶋秀展常務理事代行と荒木恵事務局長から一行の日程等について説明を行いました。一行には、週末を除き、全行事に側嶋常務理事代行が同行しました。

また、８月29日夕刻、ＡＰＩＣは重家理事長主催の一行歓迎夕食会を開催しました。同夕食会には、アデルバイ駐日パラオ大使を始め日パラオ関係に従事されている方々やパラオからＡＰＩＣの奨学金プログラムで上智大学に留学している学生を含め、約20名が出席し、和やかな雰囲気の下、一行を歓迎しました。

野菜作り現場の視察、説明の聴取等

ビルン・サリー大酋長は、パラオにおいて野菜作りを振興することに関心があり、埼玉県で農場視察等を行いました。まず、８月29日に深谷市の「ヤサイな仲間たちファーム」を訪問し、そのレストランで野菜を中心とする昼食をとった後に、同ファーム構想を提案して実現させ、現在、同ファームの責任者を務めている松村佳代氏から、同ファームにおいて、様々な野菜を栽培し来訪者にこれらを収穫する体験をしてもらっていること、同市で収穫された野菜等をそこのマルシェで販売していること、野菜を中心とする食事を提供するレストランを運営していること等について説明を受けました。その後、上里町の須賀農場を訪問し、同農場が長年、化学肥料を使わずに植物性堆肥のみを使った自然農法で野菜作りをしていること等について説明を受け、ピーマンと茄子の栽培の状況を視察しました。８月30日午後には、さいたま市の関東農政局を訪問し、関東における野菜の栽培状況等について、８月31日を「野菜の日」とし、野菜の消費拡大のための取組が行われていることを含め、詳しく説明を受けました。これに先立ち、一行は８月30日の午前中にＪＩＣＡ本部を訪問し、ＪＩＣＡによるパラオに対する協力やＪＩＣＡの農業関連支援策等について説明を受け、今後、パラオにおいてＪＩＣＡから野菜作りに関する協力を得る可能性について議論しました。

滞在中の主なスケジュール

8/28（水）	来日
8/29（木）	APIC によるブリーフィング ヤサイな仲間たちファーム 訪問 須賀農場 訪問 重家 APIC 理事長主催 歓迎夕食会
8/30（金）	JICA 訪問 関東農政局 訪問
8/31（土）	自由日（セブンスデーアドベンティスト教会 等）
9/1（日）	自由日（バイオリンコンサート等）
9/2（月）	土屋品子復興大臣 訪問 離日

土屋品子復興大臣との会談

ビルン・サリー大酋長一行は、９月２日午前、土屋品子復興大臣を訪問しました。

土屋大臣は、一行を歓迎し、父（注：故土屋義彦元参議院議長・元埼玉県知事）が、戦没者遺骨収集等で大変お世話になっているパラオとの関係を重視していたが、自分も父の遺志を引き継ぎパラオとの関係の発展に尽力していきたい旨述べ、ビルン・サリー大酋長からは、日本からパラオに対する支援に感謝し、自ら組織している団体の会議について、文化・伝統、健康、教育、環境を重視し、毎年会議を開催していることの説明があるなど、友好的な雰囲気の下で、女性のリーダー同士の意見交換が行われました。

週末日程

８月31日（土）及び９月１日（日）の週末は、パラオ大使館が一行に同行しました。一行は、８月31日は、都内のセブンスデーアドベンティスト教会の礼拝に出席し、９月１日は、バイオリン・ピアノ・チェロの三重奏のコンサートを鑑賞しました。

パラオの女性伝統的指導者一行は、１週間未満の滞在でしたが、台風10号が日本に上陸する中、日本の野菜作りに関する情報を得、日本の女性の大臣と意見交換するなど、当初の予定をすべて無事実施して、帰国しました。

1

4

3

2

1. 重家 APIC 理事長主催歓迎夕食会　2. 歓迎夕食会にてパラオ出身ザビエル留学生との面会　3. JICA 訪問　4. 関東農政局 訪問

土屋復興大臣との会談

サリー大酋長と土屋復興大臣

APIC によるブリーフィング

須賀農場 訪問

日・カリブ交流年2024記念

カリブ5カ国文化関係者招待計画

APICは2024年10月20日から27日まで、日・カリブ交流年2024を記念してカリブ諸国からの文化関係者を訪日招待し、日本での文化交流プログラムを実施しました。本プログラムには、バルバドス、ベリーズ、ジャマイカ、トリニダード・トバゴから2名ずつ、ハイチから1名、計9名が参加し、日本の伝統文化と現代の文化に触れる機会を持ちました。本招待プログラムは、カリブ諸国の政府、大学の文化関係者及びジャーナリストに、日本文化の歴史、伝統、そしてアニメなど現代文化に触れる中で、多面性を深く理解してことを目的としたもので、参加者にとって今後の日本文化普及や文化交流の礎となる知見を広げる貴重な機会となりました。

APIC 事務所にてオリエンテーション

東京視察：アニメ産業見学と伝統芸能体験

到着翌日の10月21日、午前中にまずAPIC事務所にて、重家俊範APIC理事長から歓迎の挨拶に続き、日本の国内情勢、経済等についての説明があり、その後荒木恵理事兼事務局長からプログラムの説明を行いました。参加者は全員が今回初めて日本を訪問するということで、日本の文化を学べることをとても楽しみにしているというコメントがありました。

その後、一行は、デジタルハリウッド大学の高橋光輝教授（学部長）を訪問しました。事前にアンケートをとっていた参加者の関心事項に基づき、高橋教授から日本のアニメ産業についてのブリーフィングがあり、その後質疑応答が行われました。本年は同大学が創立されて30周年に当たり、30年の歩みをまとめた記念誌が参加者に配布されて、ハリウッドの映画分野などで活躍している卒業生や日本でもアニメ分野で社長となっている人も多数いるという説明がありました。また、先日アメリカ映画界の最高の栄誉とされるアカデミー賞を主催する団体が選ぶ「学生アカデミー賞」にて同大学在学生が日本人として初めて銀賞を受賞したアニメ作品『Origami』が紹介され、参加者は日本のアニメの影響力とその背景にある技術力に改めて感銘を受けたようでした。アニメ産業界と教育機関の連携が産業全体の発展に寄与している説明もありました。カリブの国はどこも日本のアニメに興味があるというものの、輸入数や視聴数等のデータがなく、高橋先生も協力したいが、他国と比較をするにもデータがないため分析ができないとコメントされていました。そのため今後アニメを産業として育てるためにデータ収集の日本との連携についても話し合いがありました。また、ホワイト氏からはジャマイカで日本語能力を向上させた後、UWIからデジタルハリウッド大学の大学院に学生を留学させたいという発言もありました。

一行は浅草に移動し、浅草寺を自由に散策し、夕方には歌舞伎座にて、泉鏡花の『婦系図』、『源氏物語、六条御息所の巻』の演目を鑑賞し、伝統的な日本の芸能文化の深さに触れました。参加者は配布されたタブレットで英語字幕を利用し、初めての歌舞伎鑑賞にもかかわらず、物語の奥深さと美しい衣装に感動を示しました。

京都視察：文化遺産保護と多様な日本文化の体験

二日目の22日、参加者は新幹線で京都に移動し、日本の伝統文化や文化財保護についての知識を深めました。文化庁での訪問では、日本の文化財保護に関する取り組みが紹介され、具体的には無形文化遺産の保護方法や地域社会と政府の協力による支援策についての説明が行われました。質疑応答では、文化遺産登録までのプロセスや学生への文化振興への取組みに関する質問がありました。ジョンソン氏から文化庁へバルバドスの世界遺産登録のための資金提供に対するお礼としてお土産を渡されました。「自国の文化財保護の参考にしたい。また地域社会と政府の協力による日本の文化財保護の仕組みは、我々の国でも活用できるものであり、非常に参考になった。」と述べ、持続可能な文化保護に対する関心が強まりました。その後、歩いてすぐの京都御所の近くで「時代祭」行列を鑑賞しました。

午後には、金閣寺や龍安寺の石庭を訪れ、対象的な寺院の様子や日本庭園や禅文化の美しさを堪能しました。参加者の中には、庭園の静けさと調和の取れた美しさに魅了され、写真を撮る姿も見られました。

＊＊＊

三日目の23日には、京都御所のツアーに参加し、英語のガイドによる解説を聞きながら、古代の建築物や庭園を巡りました。初日に鑑賞した歌舞伎の源氏物語の舞台となった日本の皇室文化や建築構造についての説明に、参加者は興味深そうに耳を傾け、歴史ある御所の美しさを堪能しました。

同志社大学 見学

その後、同志社大学を訪問し、卒業生の能楽師・河村晴久先生に案内いただきました。同志社大学の歴史や文化遺産についての解説があり、また河村先生自身の同大学とのつながりを交えて説明がありました。

午後の活動では、東映太秦映画村にて時代劇の衣装を身につけての写真撮影や、忍者との写真撮影などが行われました。

その後、河村能舞台を訪問し、能の解説と体験をしました。観世流能楽師である河村先生から能の歴史、能と歌舞伎の違い、舞台構造、音楽、能面や衣装、所作の意味についてお話を伺いました。衣装の解説では、着付けの実演があり、スタウト氏が代表して着付けをしてもらいました。またお面の解説の中で、初日の歌舞伎の演題であった『源氏物語、六条御息所の巻』が扱われ、同じ演題であっても能では嫉妬

滞在中の主なスケジュール

10/20（日）	来日
10/21（月）	APIC 事務所にてブリーフィング デジタルハリウッド大学 訪問（高橋光輝教授） 歌舞伎 鑑賞
10/22（火）	京都へ移動 文化庁 訪問 金閣寺・龍安寺 視察
10/23（水）	京都御所 視察 同志社大学 訪問 京都太秦映画村 視察 能 体験（河村能舞台） 日本食 体験（京料理 萬重）
10/24（木）	金沢へ移動 北村工房 訪問 金沢 21 世紀美術館・兼六園・金沢城・ ひがし茶屋街 視察
10/25（金）	東京へ移動 カリブ音楽関係者ミーティング 国際交流基金 表敬訪問 外務省 表敬訪問 重家 APIC 事長主催夕食会
10/26（土）	自由日
10/27（日）	離日

◆参加者◆

【ジャマイカ】
- リビングストン・ホワイト博士（西インド諸島大学（UWI）メディア・コミュニケーション学部、学部長）
- ジャネット・ダイアー博士（ホスピタリティ専門学校、学長）

【トリニダード・トバゴ】
- ニコル・ロバーツ博士（西インド諸島大学（UWI）語学学習センター、センター長）
- キミー・スタウト氏（観光文化芸術省、文化プログラム調整官）

【ハイチ】
- ガイエル・シーザー氏（ル・ヌーベリスト紙、チケットマガジン筆頭編集者）

【バルバドス】
- シェロン・ジョンソン博士（首相府文化課、シニア文化政策・調査担当官）
- ガルシン・カーター氏（ネイション新聞社、シニアレポーター）

【ベリーズ】
- セバスチャン・カエタノ氏（グレート・ベリーズTV、ニュースディレクター）
- ルイス・ウエイド氏（プラスTV、テレビジャーナリスト）

1. デジタルハリウッド大学にてブリーフィング
2. 文化庁にてジョンソン博士からお土産の贈呈

の炎に燃え狂う鬼女を、般若面を被って表現していることなど歌舞伎との表現方法の違いについて大変よく理解できたと参加者は喜んでいました。能のテーマである「収穫の祈り」や「自然との共存」が現代にも通じる重要な概念であることが説明され、日本文化が表現する自然観や共生の思想についての理解を深めました。ダイアー氏は「東京で鑑賞した歌舞伎と能の違いについて理解が深まった。また能についての詳細な解説、文化保存の重要性についての理解が深まった。」と河村先生に対する感謝の意が直接伝えられました。

京都日程最後には、日本の食文化という視点から京料理・萬重で、京料理のコースと日本酒を堪能しました。日本食における四季折々の食材を利用することや見た目の美しさに感動している様子でした。社長の田村圭吾さんは文化庁の文化交流使に任命しており、スタウト氏は田村さんを本国に呼びたいと御本人に直接伝えていました。

能衣裳、着付け実演

北村工房 訪問

金沢視察：伝統工芸と現代アート

四日目の24日には金沢に移動し、「雲龍庵」の漆工家・北村辰夫先生の北村工房（輪島が正月の地震で被災したため金沢の仮工房）を訪れて日本の伝統工芸の緻密な技術に触れました。参加者は輪島塗の制作過程を間近で見学し、その技術と美しさに心を打たれました。最後には、印籠と香箱を見せていただき、作品の緻密さを実感し、さらに香箱の制作には3年を要することに驚きの声が上がりました。参加者からは、技術の継承や若手の人材育成、高度な技術を間近で見ることができ、大変満足した様子でした。

午後には21世紀美術館を訪問し、現代アートと午前の伝統的な工芸が共存する金沢でのアート鑑賞を楽しみました。その後、兼六園、金沢城、ひがし茶屋街を散策しました。それぞれ短い時間ではありましたが、金沢を堪能できました。また参加者はひがし茶屋街で抹茶と茶道具をお土産として購入していました。

再び東京視察・訪問

五日目の25日には、一行は、金沢を発ち新幹線で東京に戻った後、平山達夫元在トリニダード・トバゴ大使、小寺由莉ライムレコード代表、有賀由紀子カリビアンマーケット代表と昼食をとりつつ懇談しました。その際、カリブ音楽と日本音楽とのコラボレーションを含め、関係者による対応状況について説明がありました。

その後国際交流基金を訪問し、黒澤信也理事長から日本におけるインバウンドの重要性が強調された後、野口晃佑秘書室長から国際交流基金の日本文化、日本語、国際交流に関する活動について説明があり、同基金の業務内容や日本とカリブ諸国との交流等について意見交換しました。

次に外務省を訪問し、野口泰中南米局長と今回のプログラムの内容と日本とカリブ諸国との関係等について意見交換しました。各参加者からは今回の訪問で得た知見等が述べられ、それぞれの今後の活動に活かしたいという抱負等が語られました。

プログラムの最後は重家ＡＰＩＣ理事長主催夕食会で締めくくられました。ショーナ-ケイ・M・リチャーズ駐日ジャマイカ大使による乾杯の挨拶があり、各国を代表して5名の参加者が感謝とプログラムを通しての感想、今後の抱負等を述べました。

Letter from Participant（一部抜粋）

ガルシン・カーター さん

Now back in Barbados and settled back on the job, I would like to express sincere thanks to you and the entire team at APIC for facilitating what has been for me a once-in-a-lifetime experience.

The visit to Japan for the celebration of Japan-CARICOM Friendship Year, has afforded me the opportunity to be exposed to and experience your culture as well as to interact with your people in a way that has given me a clearer perspective on our differences and our similarities. This is invaluable in a world where it is necessary to build bridges of understanding and co-operation for peace and I cannot tell you what it means to have had the experience.

I shall be writing about the visit. Hoping to return to Japan one day for a longer stay.

留学生支援事業

今期の新入生たち

APIC-UWI 留学生

「APIC-UWI 留学生奨学制度」カリブ地域の国々の環境問題に関して取り組み、国際社会に貢献できる人物を育成することを目的として、上記 APIC-MCT 留学制度と同様に、上智大学大学院地球環境学研究科で修士号の取得を支援するプログラムです。西インド諸島大学（The University of the West Indies：UWI）・上智大学・APIC の三者間の協定が締結され、2023 年度より開始しました。

第２期 APIC-UWI 留学生が上智大学に入学

2024 年 9 月 21 日、第 2 期 APIC-UWI 留学生として
バルバドス出身の**アーシャ・ギッテンスさん**が上智大学大学院に入学しました。

第2期 APIC-UWI 留学生

アーシャ・ギッテンス さん
Ms. Asha Gittens

私の名前はアーシャ・ギッテンスです。カリブ海にある面積が 166 平方マイルしかない小さな島国、バルバドス出身です。私は西インド諸島大学ケーブ・ヒル校で生物学と環境科学を専攻し、2024 年 9 月に卒業しました。最終学期にある教授が上智大学と APIC による奨学金についての紹介があり、豊かな文化（と食べ物！）がある日本で学ぶ機会を得ることができました。

上智大学のプログラムを調べてみたところ、それは自分のこれまでの研究分野を超えるものであると感じました。それまでは純粋な科学の視点から自然環境に焦点を当てていたからです。不安もありましたが、経済学や社会科学といった他の分野を学ぶことで考え方の幅を広げ、よりグローバルな視点で世界を見る良い機会になると思い、挑戦することに決めました。以前の大学では地域研究が盛んで、国際的な教授による講義も多く行われましたが、そのような形で学べる世界には限りがあります。上智大学で世界中の人々と出会い、共に学び、直接彼らから学ぶことができています。

現在に至るまで、日本での生活を非常に楽しんでおり、この貴重な機会に感謝しています。特に、寛大で親切な APIC に心から感謝しています。私は科学のバックグラウンドと、上智大学で他の学問分野から学ぶことを活かして、意義ある研究に取り組んでいきたいと思っています。

※留学生からのメッセージに関して APIC による仮訳

APIC-MCT 留学生

「APIC-MCT 留学生奨学制度」は、上智大学・ミクロネシア自然保護基金（Micronesia Conservation Trust：MCT）・APIC の三者間の合意に基づき、ミクロネシア 3 カ国からの留学生を受け入れ、上智大学大学院地球環境学研究科での修士号取得を支援するプログラムです。2017 年のプログラム開始以降、これまでに 9 名が卒業しました。

第 8 期 APIC-MCT 留学生が上智大学大学院に入学

2024 年 9 月 21 日、第 8 期 APIC-MCT 留学生としてミクロネシア連邦出身の
トロメイン・ジョアブさんと**ルーク・カルロスさん**が上智大学大学院に入学しました。

第8期 APIC-MCT 留学生

トロメイン・ジョアブ さん
Ms. Trommainnee Joab

カセレーリエ！私はトロメイン・クリスタベル・ジョアブです。私はミクロネシア連邦のガーデンアイランド、ポンペイ州にあるアワック村出身です。現在は 22 歳で、上智大学地球環境学研究科に在籍しています。学士課程の研究ではハワイ大学ヒロ校で環境学に焦点を当てながら地理の学位を取得しました。私の趣味は多岐にわたり、音楽・ポッドキャスト鑑賞や水泳、ジャーナリング等が好きです。

日本への移住はとても緊張すると同時にワクワクするものでした。それまで住んでいたどの場所とも全く異なる場所で、新しい冒険を始められることに胸が高鳴っていたのです。私は人生のほとんどをポンペイで過ごし、その後ハワイに移り、約5年間住んでいました。そのため、慣れ親しんだ場所から、新しい環境に馴染むことに少し不安を感じていました。

日本に到着してから、いくつかのカルチャーショックを受けました。例えば、国全体が驚くほど清潔であることや、公共のゴミ箱がほとんどないことに驚きました。また、日本が現金中心の社会であることにも驚かされました。最初はこのような課題があったものの、日本の豊かな文化や伝統を学び、受け入れることができて、本当に貴重な経験になっています。

第８期 APIC-MCT 留学生

ルーク・カルロス さん
Mr. Luke Carlos

カセレーリエ、そして、こんにちは。私はミクロネシア連邦ポンペイ島出身のルーク・カルロスです。現在、上智大学の地球環境学研究科修士課程でエネルギー安全保障をテーマに研究しています。

ポンペイの田舎で育った私は、地域コミュニティの生活様式における伝統的価値観や技術を深く経験し、環境（土地や海等の物質的なもののみならず、共存する生物や人間含むもの）を重んじることを教えられました。私たちの先住民の価値観は西洋の環境主義とは異なるもので、節度と必要性の概念を強調します。

自然と大学では海洋科学を選び、さらに地理空間情報科学（GIS）へと関心を広げました。これは私に根付く伝統的価値観や実践と、現代世界の技術的進歩を統合したいという思いからでした。

気候変動問題を考える際には、伝統と現代性の均衡を保ちつつ、双方を重視する方法として GIS の研究の重要性をより感じるようになりました。卒業後は気候変動の影響を不均衡に受けている国々や植民地国に対し、エネルギー安全保障がどのように影響するかに関する科学的理解に貢献したいと考えています。

私の目標を支援していただき、心から感謝いたします。また、更に多くの学生がこのプログラムに鼓舞されることを祈っています。

ザビエル留学生

「**ザビエル留学生奨学金**」は 2014 年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦チューク州にあるザビエル高校・上智大学・APIC の三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学への留学生を支援するプログラムです。本奨学金制度により、これまでに 6 名が本奨学金制度によって上智大学を卒業しました。

第 9 期ザビエル留学生が上智大学に入学

2024 年 9 月 21 日、第 9 期ザビエル留学生としてミクロネシア連邦出身の**ジョセフィアナ・サクさん**と、
パラオ出身の**ジェレマイア・スリオルさん**が上智大学に入学しました。

第９期ザビエル留学生

ジョセフィアナ・サク さん
Ms. Josephieanna Sak

はじめまして。私はミクロネシア連邦のチューク出身のジジョセフィアナ・サクです。皆にはケイケイと呼ばれています。現在、上智大学のグローバル・スタディーズ学部の Sophia Program for Sustainable Futures に所属する 1 年生です。

来日当初、大きなカルチャーショックを受けました。一度に多くの人が電車に乗り込む光景に驚き、少し怖かったですが、今では慣れてきました。日本の美しさに感動しており、これからもっといろいろな場所を訪れたいです。

私は毎日の通学時間を楽しんでいます。学校生活は最初は不安でしたが、さまざまな国から来た人と出会うことができました。学校の雰囲気はとても温かく居心地が良いです。この生活を通じて、自立と責任感が身についていると感じます。

滞在中に専攻分野をしっかり学び、将来の法律関係の職に役立てたいと考えています。また、自分の興味や関心、強みを探求していきたいと思います。上智大学を選んだ理由は、その使命「他者のために、他者とともに」に感銘を受けたからです。このことばが、私にネットワークを広げることや目標達成に向けて努力を続けるモチベーションを与えてくれています。

第９期ザビエル留学生

ジェレマイア・スリオル さん
Mr. Jeremiah Suliol

こんにちは、皆さん！私はミクロネシア連邦（FSM）出身のジェレマイア・スリオルです。現在、上智大学の経済学部経営学科（SPSF）に所属する 1 年生です。

上智大学を選んだ理由は、新しいことに挑戦したいと思ったからです。私は、多様性を重視する日本の大学生活に身を置きたいと希望していました。これまで自分の島国を出たことがなかったため、異なる文化やライフスタイルを体験しながら、日本のビジネスの視点から経営について学びたいと思いました。

日本に初めて来たときは、大きなカルチャーショックを受けました。こんなにも多くの人々に囲まれる経験はこれまでになく、特に電車での体験は驚きました。しかし、生活を続けるうちに徐々に慣れてきて、今ではここでの生活を楽しんでいます。

大学生活の中で、新しいことを探求し、体験できる機会がたくさんあると感じています。これからも引き続き勉強に励みながら、日本のさまざまな場所やライフスタイルを探り、経験を積んで成長していきたいと思っています。

「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い

学生への支援をより一層充実させるため、本奨学金制度へのご寄付をお願いしております。いただいた寄付金は、留学生の受け入れにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等に活用させていただいております。

皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。皆様の温かいご支援に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご協力をお願い申し上げます。

対　象　ザビエル高校卒業生（毎年1～2 名入学）

留学先　上智大学国際教養学部 / 理工学部英語コース /
Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)

奨学金　卒業までの 4 年間の奨学金を授与

振込先　三菱 UFJ 銀行　本店（店番 001）　普通口座 1660339
口座名：一般財団法人　国際協力推進協会　奨学金募金口
カナ名：ザイ）コクサイ キヨウリヨク スイシン キヨウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

●ザビエル高校（Xavier High School）とは

1952 年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4 年制の男女共学で、生徒の数は約 150 名です。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ元大統領やクリスチャン元大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。

第６期 APIC-MCT 留学生が上智大学大学院を卒業

2024 年 9 月 20 日、第 6 期 APIC-MCT 留学生の**ノーヴァー・ジュリアさん**が上智大学大学院を卒業しました。
同大学院地球環境学研究科で 2 年間、勉学に励みました。

上智大学大学院を卒業した第６期 APIC-MCT 留学生のノーヴァーさんに、在学中の経験や今後の目標についてインタビューを行いました。（APIC による仮訳）

INTERVIEW

第６期 APIC-MCT 留学生

ノーヴァー・ジュリア さん
Mr. Nover Juria

1．上智大学での学びについて教えてください。なぜ修士課程で地球環境学研究科を選びましたか？また、どのようなことを研究していましたか？

まず、気候の専門家としての仕事や環境保護活動に直結する、環境や気候研究の多彩なコースが提供されている点が魅力的でした。さらに、ミクロネシアの学生に対するAPIC-MCT上智大学奨学金を受給しながら、質の高い教育受ける機会に恵まれたことがあげられます。修士論文では、マーシャル諸島を例に、政策と実際の気候レジリエンス戦略の実施の間にあるギャップを埋めることを目指しました。

2．学校生活はどのようなものでしたか。

学問的な知見を得るだけでなく、世界各国から来たユニークな視点を持つ多様な学生と出会うことができ、忘れられない経験となりました。国際的な経験は学びを豊かにし、太平洋地域の気候変動影響を含む様々な問題に対する理解を深めることができました。また、指導教員のあん・まくどなると教授をはじめ、経験豊富な教授陣と共に活動する機会にも恵まれました。

3．日本での最も印象に残っていることは何ですか。

気候変動適応のための自然を基盤とした解決策に関して、カリブ地域の大学との共同研究をしたことです。気候変動がもたらす世界的な影響を多様な視点から見ることができ、マーシャル諸島のような島国に適用可能な解決策を見つける意欲がさらに深まりました。

4．上智大学や日本に来て良かったと思ったことは何ですか。何か目標を達成できましたか。

学びの中で高度な学問文化に触れることができ、仕事や研究に非常に良い影響を与えてくれました。目標だった修士論文を完成させ、気候対策の共同研究プロジェクトに積極的に参加する等、太平洋地域で気候学者や環境・社会保護の専門家としてのキャリアに役立つ経験を積むという目標を達成することができました。

5．今後の目標について教えてください。

今の目標はマーシャル諸島政府のために、気候変動適応対策、特に早期警報システムや災害リスク軽減戦略の強化に貢献することです。個人的には、島嶼地域における環境レジリエンスの促進に力を入れていきたいと考えています。将来的には、上智大学で学んだスキルや知見を活かし、より広範な気候適応政策に貢献できるようになりたいです。

6．これから日本に留学する学生にメッセージやアドバイスがあれば教えてください。

留学という旅を心から受け入れ、学問だけでなく、文化や人々、環境からも学び、自己を形成してください。日本は環境問題に関する重要な視点を提供してくれる場であり、知識とレジリエンスを得られます。日本での学びに大変感謝しています。

APIC早朝国際情勢講演会

毎月1回（8月以外）開催される**APIC早朝国際情勢講演会**では、外務省幹部、在外大使などを講師としてお迎えし、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。現職の外務事務次官や外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。

新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、2021年5月からはオンラインでの配信も開始しました。現在は会場・オンライン同時配信で開催しております。

本講演は、APIC維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載しているAPIC事務局の連絡先にご照会ください。

講師・演題一覧（2024 年 7 月～ 12 月実施分）

【第 408 回早朝国際情勢講演会】
日時：令和 6 年 7 月 25 日（木）
講師：前駐フィリピン特命全権大使　越川 和彦 氏
演題：「最近のフィリピン情勢と日比関係
　　ー歴史的転換期ー」

【第 409 回早朝国際情勢講演会】
日時：令和 6 年 9 月 19 日（木）
講師：前駐韓国特命全権大使　相星 孝一 氏
演題：「最近の韓国情勢および日韓関係について」

【第 410 回早朝国際情勢講演会】
日時：令和 6 年 10 月 17 日（木）
講師：前駐ベトナム特命全権大使　山田 滝雄 氏
演題：「最近のベトナム情勢と日越関係
　　ーベトナム勤務を顧みてー」

【第 411 回早朝国際情勢講演会】
日時：令和 6 年 11 月 21 日（木）
講師：外務省北米局審議官　熊谷 直樹 氏
演題：「米大統領選挙と今後の日米関係」

【第 412 回早朝国際情勢講演会】
日時：令和 6 年 12 月 19 日（木）
講師：外務省中東アフリカ局長　安藤 俊英 氏
演題：「最近の中東情勢と日本の外交」

バルバドス 歴史の散歩道

その５　**第４部　海賊たちの系譜**

寄稿：元 駐バルバドス日本国大使　品田 光彦

APIC ウェブサイトでは、品田光彦 元駐バルバドス日本国大使寄稿の連続コラム「バルバドス　歴史の散歩道」を配信しております。本誌では「バルバドス 歴史の散歩道（その５）」の内容を掲載しています（2021 年執筆）。その他のコラムについては、APIC ウェブサイトをご覧ください。

18世紀の初めごろ、アフリカ西岸からカリブ海、南米の東岸までを股にかけて暴れまわったバーソロミュー・ロバーツ（1682～1722年）という海賊がいました。

「カタギの仕事なんぞをしていたのでは、さんざんコキ使われて分け前も給料もスズメの涙だ。海賊稼業なら楽をして好きなように暴れ回り、がっぽり稼いで腹一杯喰えるぞ。どっちが得かよく考えてみろ。危ない橋をわたるのが怖いというのか？そんなことはない。太く短くというのが俺の生き方だ」――こんな言葉を残したロバーツは「ブラック・バート」の異名でも知られていたのですが、この男はある理由から、カリブ海でバルバドスの船を見つけるたびに、追いかけ回してボコボコにやっつけたという言い伝えが残っています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なぜカリブでは海賊が猖獗（しょうけつ）したのか

「カリブ海」と聞くと、海賊を連想する人は多いのではないでしょうか。カリブに海賊が現れたのは16世紀にさかのぼります。この頃、カリブや中南米はスペインの独壇場でした。スペインの商船隊が独占的に運びだす富にまず目をつけたのはバロワ朝時代のフランスです。フランス王フランソワ１世は、自国船がスペインの船や島を襲撃することに「認可」を与えていました。

すこし遅れてイギリス船やオランダ船もスペイン船襲撃に加わるようになります。

エリザベス1世治下のイギリスでは、ジョン・ホーキンスやフランシス・ドレイク（本稿・第1部「珊瑚の島の前史」参照）などの武装船団が王室の後押しをうけてスペインの富を掠奪するようになります。カリブにおける初期の海賊行為は、このように各国がスペインの海上覇権に挑戦するために通商を妨害するゲリラ的な襲撃からはじまりました。

カリブの海賊が黄金期をむかえるのは、それからおよそ1世紀後の17世紀後半から18世紀前半にかけてです。この時期には、スペインの力が衰えるなか、イギリス、フランス、オランダといった新興勢力がいよいよカリブの島々を植民地化し、そこでの砂糖生産が飛躍的に伸びて、プランテーションの労働力を確保するための奴隷貿易がさかんになっていました。

バーソロミュー・ロバーツ

ヨーロッパ、アフリカ、カリブのあいだでは、銀や砂糖、植民地への生活物資、プランテーション領主が使う贅沢品、そしてアフリカ人奴隷といった莫大な富を積んだ船がたえず行き交うようになります。そのいっぽうで、ヨーロッパではピューリタン革命によるイギリスの混乱、3次にわたる英蘭戦争、そして多くの国を巻き込んだスペイン継承戦争といった戦乱が続いていました。このため各国は大西洋やカリブ海を航行する自国の商船や奴隷船の警護まで、なかなか手がまわらなかったのです。

バルバドスをはじめとする植民地の島々は、無頼の徒があやつる武装船にカネをはらって警護をたのむようになります。彼らの多くは雇い主の船を守るだけでなく、ほかの船を襲うことが黙認されていたので公然と掠奪をおこなうようになりました。このような私掠船が、しだいに雇い主のコントロールをはなれて海賊を本業にするようになることも往々にしてあったといわれます。カリブは富を手にいれるためには手段をえらばない「やりたい放題の海」となっていきました。

バーソロミュー・ロバーツは、そんな時代の海賊でした。イギリス・ウェールズ生まれのロバーツは生涯で４百隻もの船を襲い、海賊史上でもっとも成功したといわれる男です。そのロバーツが目のかたきにしていたのがバルバドスでした。それは、彼がまだ海賊船の新米船長だったころ、バルバドス近海での「操業中」に、バルバドス総督が派遣した追尾船にさんざんな目にあわされて命からがら逃げたという苦い体験をしたからです。

紳士海賊スティード・ボネット

ロバーツはいわば、バルバドスの天敵だったわけですが、続いてはバルバドス出身の海賊たちを紹介しましょう。

紳士海賊スティード・ボネット

アメリカ合衆国サウスカロライナ州のチャールストン。大西洋にのぞむこの町に、ホワイトポイント・ガーデンという公園があります。一画に小さな記念碑があって、碑文にはこんなことが書かれています。

「1718年の秋、ウィリアム・レット大佐によって捕らえられた悪名高き〝紳士海賊〟スティード・ボネットとその配下の者たち29人が、この近くにおいて裁判にかけられた。彼らが、ニコラス・トロット裁判長により当然の報いを言いわたされたことはアメリカ史上よく知られている。この件につづいて、ロバート・ジョンソン総督に捕らえられたリチャード・ウォーリー以下の船員計19人も、同裁判長に有罪を宣告され、絞首刑に処せられた。これらの者らは皆、ホワイトポイント・ガーデン外側にある湿地の、干潮標より上の部分に葬られた」

北アメリカのイギリス植民地官憲につかまえられた海賊集団が大量処刑されたという記録です。「干潮標より上の部分に葬られた」ということは、満潮になれば水につかってしまうので、遺体はじきに無残な状態になったことでしょう。

この碑文にでてくる「悪名高き紳士海賊」スティード・ボネット（1688～1718年）は、バルバドス生まれの海賊です。

ボネットはバルバドス島クライスト・チャーチ教区に生まれました。生家は砂糖プランテーションを所有する裕福な地主の家柄でした。幼くして父をなくした彼が海賊になるまでの記録はあまり残っておらず、わかっているのは彼が「少佐」という肩書きをもっていたので、おそらくバルバドス植民地民兵部隊の士官だったであろうということと、21歳のときに結婚したということくらいです。妻になったのは、首邑ブリッジタウンの良家出身であるメアリー・アランビーという女性でした。夫婦のあいだには４人の子が生まれます。

このままいけば地主としてたくさんの黒人奴隷をつかってプランテーションを経営し安楽な生涯をおくったというところだったのでしょう。

ところが、このボネット、なにを思ったのか、結婚８年目の年に突然、海賊になる決心をして逐電してしまったのです。地主階級の紳士（ジェントルマン）だった男が転身して海賊になったので「紳士海賊」とあだ名されるようになったのです。

ろくに航海の経験もないボネットが、どうして海賊になったのかについては諸説あるのですが、有力な説は「異常に口やかましい妻メアリーとの結婚生活に嫌気がさしたから」。

まさかと思うかもしれませんが、1724年にイギリスで出版された「もっとも悪名高き海賊たちの強奪と殺人の歴史」（略称：「海賊史」）という本にちゃんとそう書いてあるのです。（註１）この本は、バーソロミュー・ロバーツやスティード・ボネットはじめ、多くの海賊たちの生きざまをくわしく紹介しています。「極悪非道の海の無法者たち」という後世の海賊のイメージを創ったとされる文献で、のちに有名な小説「宝島」を著したロバート・ルイス・スティーブンソンも、この本をかなり参考にしたといわれます。

ボネットの船出

海賊になった動機もさることながら、紳士海賊ボネットのやり方ははじめから一風変わっていました。

まず肝腎の船。海賊船というと、乗っ盗った商船を転用したり、私掠活動をしていた船が本格的に海賊船になったりするというのがふつうでした。しかしそこは地主でカネがあるボネットのこと。地元の造船所に10門の大砲をそなえた新しい帆船を発注します。

つぎに手下となる乗組員。海賊業界に縁がなかった彼に手下がいたはずもなく、70人以上の与太者を新規採用するということをしています。しかも報酬は略奪品の分配という業界の慣行ではなく「給与制」だったということです。

どうもこのへんからしてボネットがその後にたどった運命を暗示しているようです。奥さんから逃げ出すために彼が海賊になったというのは、にわかには信じがたいような話ではあるのですが、筆者はかなり信憑性があるのではないかと思っています。なにしろ、発注した船の名前が「リベンジ号」だったというのですから。

ともかく、なんとか海賊として起業した彼は、1717年春のある日、夜が明けないうちにカーライル湾からひそかに出航したのでした。

ボネットと「黒ひげ」

ボネットはカリブ海を北上しながら何隻かの船を襲うことに成功します。しかも途中でわざわざバルバドスの船を2隻襲ったのですが、これは自分が海賊として暴れまわっていることを故郷に知らせるためだったようで、なにかよほど心に秘めたところがあったのでしょう。

この年の秋、ボネットは海賊の巣窟だったバハマのナッソーでエドワード・ティーチという同業者に出会います。ボネットはそれまでの掠奪の際の戦闘で負った怪我で体調が悪かったこともあって、リベンジ号の指揮権をティーチにゆずり、その傘下に入ることになります。

体調もさることながら、しょせんは地主の家のぼんぼん育ちのボネット。荒くれの手下たちからもなめられ、ボスとしての自信を失っていたようです。ぱっとしないヤクザの親分が、もっと大きな組織の組長のところに身を寄せて客分になったようなものですが、頼った相手が悪かった。エドワード・ティーチの別名は「黒ひげ」。イギリスのブリストル生まれだとされる黒ひげは、その荒っぽい仕事ぶりによって海賊史上もっとも悪名高い男のひとりで、後世、多くの小説や映画にも登場する伝説的な海賊です。

黒ひげとボネットは、数ヶ月のあいだ、カリブ海北部を荒らしまわったあと、北米カロライナのイギリス植民地まで足をのばします。このころには配下の船団は4隻にふくれあがっていました。

歴史にのこる「チャールズタウン港封鎖事件」というのがあります。黒ひげとボネットがサウスカロライナのチャールズタウン（現チャールストン）の港を封鎖して多くの船を拿捕し積み荷を強奪したのです。人質をとって、町の当局に命じて自分たち用の薬を届けさせるということまでやっています。このころがボネットの海賊稼業のピークだったようですが、うまいことは長続きしません。彼は結局、黒ひげに裏切られてしまうのです。

あるときボネットがリベンジ号の修理のために、南下してセント・トーマス島（当時デンマーク領）に短い航海をしたあと戻って来ると、手ぐすねを引いて待っていた黒ひげは、リベンジ号の積み荷を奪い取り、船員の大部分も引き連れて、ボネットを置き去りにして逃走してしまったのでした。私掠船のヒラ船員からたたき上げてきた黒ひげにとってはボネットなど素人も同然。はじめからそのつもりで機会をうかがっていたのか、あるいは「こいつと組んでいたのではこのさき足手まといになるだけだ」と考えたのかもしれません。

ボネットは仕方なく、残されたわずかな手下をリベンジ号に乗せて出帆します。けれども積み荷はすべて黒ひげに持ち逃げされてしまっています。北アメリカの大西洋岸でケチな掠奪をしながら、なんとか食いつないでいました。

ボネットの末路

翌1718年の夏、リベンジ号がノースカロライナのケープフィア河口に停泊してハリケーンシーズンが過ぎるのを待っていたときのこと。

彼の居場所がサウスカロライナ植民地のロバート・ジョンソン総督の知るところとなります。先だって黒ひげとボネットによるチャールズタウン港封鎖事件で面子を丸つぶれにされ怒り心頭に発していたジョンソン総督は、部下のウィリアム・レット大佐に追撃を命じました。相棒の黒ひげはとうにいなくなってしまっていたので、ボネットはリベンジ号1隻で圧倒的に優勢なサウスカロライナ植民地軍と対峙するハメにおちいります。

勝敗ははじめから明らかでした。レット大佐指揮下の兵士たちがリベンジ号に乗り込んでくると、ボネットは手下たちに船底の火薬庫を爆破することを命じます。しかし、すでに戦意喪失していた手下たちは応じず、白旗をあげてしまいました。こうして捕まえられたボネット一味は、チャールズタウンに連行されます。

例のホワイトポイント・ガーデンの碑文に記録されているように、ボネットと手下たちには絞首刑が宣告されました。この時のボネットの振る舞いはかなり見苦しいものだったようです。彼は裁判で「部下たちが自分の命令にそむいて勝手に海賊行為をはたらいたのだ」と言い訳をしています。無能な管理職の典型です。死刑が言い渡されてからも「命を助けてくれれば二度と海賊行為はしないので手足を切り落とされてもかまわない」とジョンソン総督に助命を乞う手紙を送って往生際の悪いところを発揮。そしてその年の12月10日、いよいよ絞首台に登らされる段になると、ひざまずいて泣き叫び、面白半分に集まった野次馬たちにむしろ涙を流させるという愁嘆場を演じたということです。

ボネット処刑のようす

結局、故郷から遠く離れたサウスカロライナで首吊りにされて湿地帯に葬られてしまったわけですが、ふりかえって見れば、よせばいいのに海賊になり、バルバドスを出てから最期をとげるまでわずか1年半。途中で部下からはそっぽを向かれるわ、黒ひげの騙し討ちにあうわと、ボネットの極道生活は、いまひとつさえないものだったようです。

そもそも「異常に口やかましい」女性と結婚したり、悪がしこい黒ひげと組んだりと、人を見る目もなかったのかもしれません。でも、いくら悪妻からも逃げるためとはいえ、なにも海賊にならなくとも、奥さんの言うことを聞き流すことにするとか、お金をもってどこかに逃げるとか、他にやりようはいくらでもあったのではないか、それともよほど自暴自棄になっていたということなのだろうかと、筆者はボネットについて調べているうちに、なぜか身につまされて切ない気持ちになってしまったのでした。(註2)

ところで、可哀想なボネットを裏切った黒ひげは、その後どうなったのでしょうか？

黒ひげはその後も北米大陸南部のイギリス植民地沿岸を荒らしまわっていました。けれども、結局はバージニア近海で植民地官憲の船隊に追い詰められ、船上の白兵戦で壮絶な最期をとげます。彼の死体の胴体は海に投げ捨てられ、首はバージニア軍船の舳先にさらされたということです。ボネットが処刑される20日ほど前のことでした。

（第4部「海賊たちの系譜（続き）」に続く）

（本稿は筆者の個人的な見解をまとめたものであり、筆者が属する組織の見解を示すものではありません。）

黒ひげ

● **註1**　「海賊史」の著者はチャールズ・ジョンソンという人物です。英語で書かれた本なのでイギリス人であることはたしかなのですが、正体はよくわかっていません。チャールズ・ジョンソンというありふれた名前は、おそらく偽名であって、海賊たちのプロフィールを克明に描いていることから、この男も実は海賊だったのではないかといわれています。

● **註2**　バルバドスでは最近になって「自分の先祖は、紳士海賊ボネットが処刑されたあと彼の未亡人と結婚した」と称する人物があらわれました。この人物によれば「ボネットが海賊になったのは悪妻から逃げるためではなかった。ボネットが幼いころ、夫（ボネットの父親）に先立たれたボネットの母親が再婚した相手、つまりボネットの義父が家の財産を持ち逃げしてカロライナに逃げたため、ボネットは義父に復讐しようと「リベンジ号」を仕立てて海賊になりカロライナを目指したのだ」そうです（2019年2月14日付のバルバドス日刊紙「デイリーネーション」の記事）。しかし、これだとボネットが妻と4人の子供を残してまで海賊になったことが説明できないので、筆者はやはりボネットの死後まもなく書かれた「海賊史」にある「悪妻からの逃亡説」のほうが信用できるのではないかと考えています。

令和５年度
（2023年度）

（令和5年7月1日～令和6年6月30日まで）

事業報告書

【簡略版】

※本誌では簡略版を掲載しています。
詳細につきましてはAPICホームページをご覧ください。

1．太平洋島嶼国開発協力事業

（1）太平洋諸国・大学生招待計画【実施】

毎年1月に太平洋諸国から数名の大学生を招待し、上智大学の短期プログラムJanuary Session in Japanese Studiesに参加させ、併せてAPICによる文化交流活動事業などを実施してきており、昨年度は、COVID-19の影響でJanuary Sessionがオンライン実施となったことで、日本での対面授業及び様々な体験が日本に対する理解を深めることに寄与することに期待し、対面で予定されていた2023年7月実施のSummer Sessionでの実施に変更した。

本年度は太平洋からは、3名（ナウル、パラオ、ミクロネシア連邦）の学生を招待した。APICとして提供する週末のプログラムとして、都内・横浜観光、また株式会社エヌアイデイの協力のもと、千葉県香取市佐原を訪れ、現地の高校生と交流。その後「佐原の大祭 夏祭り」に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

（2）太平洋諸国・記者招待計画【実施】

毎年10月頃に(公財)フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施しているもので、太平洋の記者を招待し、カリブ諸国・記者招待計画と一体の事業として、有力記者を招待して、我が国の環境保護、防災、エネルギー利用などについて理解を深めてもらい、我が国の現状についての広報をそれぞれの国で行ってもらうものである。プログラムコーディネーターとして、フロイド・タケウチ氏とドーン・マタス氏の2名にも本計画に参画してもらっている。本年度は、太平洋からは記者3名（ソロモン諸島、バヌアツ、グアム）を招待した。

（3）太平洋諸国・リーダー招待計画【実施】

COVID-19によるによる渡航制限の解除が進まなかったことから、具体的な招待計画を策定することが難しく、昨年度まで実施に至らなかったが、本年度から再開し、以下の1グループ3名を招待した。

①ミクロネシア連邦三カ国若手リーダー3名

2022年7月31日から8月8日の日程で、パラオ共和国の人的資源・文化・観光省よりレイモンド・オーガスト氏、ミクロネシア連邦のSteady Palms（同地域のIT・再生可能エネルギー関連サービスを提供する企業）よりヨウタ・オウエ氏、マーシャル諸島共和国の海洋資源局保護地域ネットワークオフィスよりブライアント・ゼベディ氏の3名を招待。人的資源・環境保全等の観点から視察を行った。

（4）太平洋環境セミナー【実施】

2015年7月31に上智大学と共催で「太平洋地域における環境保全シンポジウム」を開催して以来、環境セミナーシリーズとしてパラオ、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦のポンペイ州、サモアと太平洋地域での開催に続き、今回、太平洋地域で5回目となるセミナーをミクロネシア連邦のチューク州で開催。COVID-19の影響で渡航計画が立てられず、派遣する講師の予定も考慮して、延期となっていたもの。

上智大学大学院地球環境学研究科 織朱實教授の基調講演の後、上智大学アイランド・サステナビリティ研究所長・大学院地球環境学研究科 あん・まくどなると教授をモデレーターとしてパネルディスカッションを実施。チューク州が抱える問題点について活発な議論が行われた。会場には、約30名の参加者があり、上下水道関係者のほか、近隣の中学・高校生も8～9名が参加しており、若い人に対する啓蒙の機会となった。

また、本計画に合わせて、チューク州のその他場所とミクロネシア連邦ポンペイ州とマーシャル諸島共和国も訪問し、各機関の視察を行い、現地での活動について説明受け、意見交換を行った。

（5）APIC・MCT協力事業（上水道支援プロジェクト）【実施】

今年度はMCTから下記1件の要請があったため実施した。

①ミクロネシア連邦チューク州オネイ地区貯水タンク設置事業

チューク州のオネイ島には、8つの村があり、住民838人が住んでいるが、飲料水を雨水に依存しているため、貯水タンクを設置して安定的な水の確保を図ろうとするもの。1000ガロンの貯水タンクを各村に設置（計8基）するもので、州都のチュークでタンクを調達して、住民がオネイに搬送、設置しようとするもの。全体で、2万ドルの要請があったが、本年度予算計上の範囲内での支援を行うこととし、昨年度で1万ドルの支援、本年度で残りの1万ドルの支援を実施した。

（6）APICとMCTとの協力事業（大学院生支援）【実施】

APICとミクロネシア自然保護基金（Micronesia Conservation Trust：以下MCT）との連携協定に基づき、MCTの推薦により毎年ミクロネシア3カ国から留学生1～2名を受入れ、上智大学大学院地球環境学研究科で修士号を取得させるプログラム。長期的観点から環境関連に携わる人材の育成支援を目的としており、2017年のプログラム開始以降、既に9名が卒業、現在では1名の学生がそれぞれのテーマを持ちながら、研究を行っている。2024年9月に1名が卒業し、2名が入学予定となっている。

（7）上智大学 Island Sustainability 研究所との共同事業【新規】

上智大学が、2022年に島嶼部や島嶼国が良質な発展を遂げられるスキームの創成を目指し国内外を対象としたシンクタンク機能を有するIsland Sustainability研究所を設立した。同研究所の活動として、2023年9月27日、シンポジウム「ISLAND SUSTAINABILITY2030」を上智大学で主催、APICが支援した。参加者は太平洋・カリブ島嶼国の大使や大使館職員、上智大学の学生等約100名で、熱心に議論が行われた。また、2023年9月29日、島根県隠岐郡海士町にて、上智大学・海士町の共催による交流座談会『隠岐、そして、世界の島の持続的な発展のために～大切にすべきものは、そして、何を残すのか？』が開催され、30名を超える参加者とともに活発に議論が行われた。APICは一連の行程に係る交通費等を支援した。

2．日・カリブ友好協力事業

（1）西インド諸島大学・大学生招待計画【延期】

毎年1月に西インド諸島大学（UWI）の学生を太平洋諸国の大学生と同時に招待した。カリブ地域からは、5名（ジャマイカ、バルバドス、トリニダード・トバゴ、アンティグア・バーブーダ、セントルシア）の学生を招待した。（内容は、太平洋事業（1）参照。）

（2）カリブ諸国・記者招待計画【実施】

毎年10月頃に(公財)フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施している。本年は、カリブの記者1名（トリニダード・トバゴ）を招待し太平洋諸国・記者招待計画と一体の事業として実施した。（内容は、太平洋事業（2）参照。）

（3）カリブ諸国・リーダー招待計画【実施】

本年は、以下の1グループ、合計5名を招待した。

①バルバドス国民エンパワーメント・高齢者問題大臣（同行者4名）

2023年11月5日から13日まで、バルバドスからカーク・ハンフリー国民エンパワーメント・高齢者問題大臣を招待した。大臣には、国民エンパワーメント・高齢者問題省のジェフ・ウィルシャー事務次官、コリーン・ワルコット国家高齢者支援委員会局長、及び、デボラ・ノーヴィル福祉局局長とNGOであるバルバドス退職者組合のマリリン・ライスボーエン会長の計4名が同行した。日本と同様、少子高齢化の問題を抱えているバルバドスの状況に鑑み、福嶌香代子駐バルバドス日本国大使による提案及び在バルバドス日本大使館を通じた調整を踏まえ実施。

（4）西インド諸島大学・副総長/学長招待計画【延期】

過去に西インド諸島大学（UWI）の副総長及び各分校（ジャマイカ、トリニダード・トバゴ共和国、バルバドス）学長3名を同時に招待する予定があったが、日程の調整が難しいため、順次実施することとし、平成28年度にケーブヒル校学長、平成29年度にセント・オーガスティン校学長、昨年度（令和4年度）に再びケーブヒル校学長を招待。本年度は、未実現となっているUWIの副総長の訪日を実現すべく、在ジャマイカ日本大使館と調整に当たったが、実現に至らなかった。

（5）西インド諸島大学 大学院生支援【新規】

カリブ地域の環境問題に携わる人材の育成の観点から、2022年に在バルバドス日本大使館の協力も受け、UWI、上智大学、APICの三者間の協定を締結。これにより、UWIの学長推薦1名を毎年上智大学地球環境学研究科で修士号を取得させるプログラム。カリブ地域の環境問題に関して取り組み、国際社会に貢献できる人材の育成支援を目的としており、2023年秋にはUWIケーブヒル校の卒業生が1期生として同研究科に入学し在学中。2024年9月には2期生1名の入学が予定されている。

（6）上智大学 Island Sustainability 研究所との共同事業【新規】

趣旨は太平洋事業（7）と同様に実施した。

（7）日本語スピーチコンテスト支援【予備費実施】

下記、2件のコンテストを支援した。

①トリニダード・トバゴ共和国

2023年11月17日に、在トリニダード・トバゴ日本国大使館・西インド諸島大学（UWI）セント・オーガスティン校言語学習センターとの共催で実施された第6回日本語スピーチコンテストに、昨年同様、協賛という形式で、現地の日本食レストランのギフト券を賞品として提供し、支援を行った。大変賑わいのある大会となった。

②ジャマイカ

2024年6月8日に、在ジャマイカ日本国大使館・西インド諸島大学（UWI）の共催で実施された日本語スピーチコンテスト2024に、協賛というかたちで、コンテストの賞品として日本語の本や日本文化に親しんでもらえるグッズ支援を行った。当日は渥美恭弘在ジャマイカ日本大使、UWIヴィロリア現代語・文学部学科長が出席したほか、80名ほどの観客があった。

（8）ジャマイカ外務・貿易大臣歓迎昼食【新規・予備費実施】

2024年2月7日、外務省中南米局カリブ室からの要請により、外務省賓客として来日したジャマイカのカミナ・ジョンソン＝スミス外務・貿易大臣のAPIC主催歓迎昼食会を開催した。

3．国際協力に関する講演事業

（1）APIC早朝国際情勢講演会【継続】

2014年度も外務事務次官、外務審議官、局長クラスの幹部を講師として招き、国際情勢、外交、経済に関する講演と意見交換会を会場とオンラインで実施した。

（2）国際協力懇話会【継続】

3年振りとなる不定期開催、少人数を対象とした国際協力懇話会を如水会館にて2回実施した。

4．留学生奨学金事業【継続】

ザビエル高校（ミクロネシア連邦チューク州）は、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ、マーシャル諸島の最優秀の生徒が入学する高校で、イエズス会が運営。APICは上智大学と協力して本「留学生制度」を開始。

当該留学生協定に基づき、2014年から留学生の支援を開始、既に6名の卒業生を出し、現在3名の学生が在籍している。2024年9月にはミクロネシア連邦から2名の留学生が入学予定である。APICとしては今後も募金活動を積極化するとともに、留学生に対する生活費等の支給を含め留学の支援を行っていく。

（なお、APICは旅費、生活費を負担、上智大学は学費、寮費を負担。）

APIC 役員名簿

（2024 年 12 月 20 日現在）

◆ 役員

理事長	**重家 俊範**	（最終官職：外務省 駐大韓民国特命全権大使）
常務理事代行	**側嶋 秀展**	（最終官職：外務省 駐ミクロネシア連邦特命全権大使）
理事	**荒木 恵**	一般財団法人国際協力推進協会（APIC） 事務局長（最終官職：財務省 国際局付派遣職員（アジア開発銀行職員））
理事	**今野 秀洋**	一般財団法人貿易・産業協力振興財団 理事長（最終官職：経済産業審議官）
理事	**鳥飼 玖美子**	立教大学 名誉教授
理事	**村上 洋**	元 東レ株式会社 取締役／元 味の素株式会社 監査役
理事	**山本 達也**	エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長
監事	**金成 憲道**	元 ドイツ証券株式会社 取締役会長
監事	**吉川 英一**	元 株式会社三菱 UFJ 銀行 副頭取

◆ 評議員

評議員	**石堂 一成**	東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評議員	**坂本 吉弘**	一般財団法人安全保障貿易情報センター 顧問（最終官職：通商産業審議官）
評議員	**炭谷 茂**	社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長（最終官職：環境省 事務次官）
評議員	**島内 憲**	元 駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	**高原 明生**	東京女子大学 特別客員教授
評議員	**廣野 良吉**	成蹊大学 名誉教授
評議員	**本多 義人**	東神インターナショナル株式会社 名誉会長
評議員	**蓑田 秀策**	一般財団法人 100 万人のクラシックライブ 代表理事

APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省幹部・大使等による **APIC 早朝国際情勢講演会** を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。
詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場 所 The Okura Tokyo 会議場
時 間 午前 8:30 ～ 10:00（朝食付き）

お問い合わせ TEL: 03-5577-2900
EMAIL: apicinfo@apic.or.jp

令和 7 年 1 月 1 日　発行

■ **発行人**　重家　俊範

■ **発行所**　一般財団法人 国際協力推進協会（APIC）
〒 102-0094　東京都千代田区紀尾井町 6-12　紀尾井町福田家ビル 3 階
TEL: 03-5577-2900　FAX: 03-5577-2901
URL: http://www.apic.or.jp/

■ **編　集**　APIC 事務局

JAPAN APIC 一般財団法人 国際協力推進協会
Association for Promotion of International Cooperation